

第7版のはじめに

令和の時代になって初めての科研費審査の結果が先日発表された。世の中は新型コロナウイルス感染症流行の真っただ中だが、科研費審査の発表は予定通り行われた。研究者にとっては毎年、悲喜こもごもの恒例行事である。みなさんの結果はどうだったであろうか？またこの本の旧版を使っていたいただいた方の結果はどうだったであろうか？

本書はここに第7版を発行することになった。平成28年度から順次行われていた科研費改革が一段落し、本書は第7版として新しい制度の変更点や新しい申請書のフォーマットをすべて含んだ内容に全面的に改訂した。特に令和元年度（2019年度）の申請書から、これまでの「研究業績」のリストが「応募者の研究遂行能力及び研究環境」に変更されたことが画期的な変更点で、もちろん今回の第7版ではそれに対応したものに改訂した。もちろん今後も科研費制度にはさまざまな変更や修正が行われるであろうが、基本的な考え方はいつも同じであるので、その点はどの版にもきちんと書いてある。申請書作成において重要なことは、明確な研究目的とそれを実現するための具体的な研究方法を書くということである。本書では常にこの点を重点的に解説してきた。

この数年の科研費申請の変化として、Web入力が増えたことがあげられる。申請者情報や研究費の使い方、研究分担者の承認などがWeb入力で簡単になった。また審査委員には申請者の業績などを調べるためにresearchmapの活用が推奨されており、今後さらにネットを介したさまざまな情報が審査に活用されるようになるのだろう。

科研費の予算拡充や制度改革によって、採択件数および採択率はかなり上昇した。若手研究における採択率40%というのは、とても高い率である。自分が若手のときにこうだったら、どれほどよかったことだろう。しかし、残念ながらというか、一部の配分額の大きい種目を除いて、現在の科研費の配分額では最先端の研究を行うには不十分である。特に実験系の研究者にとって高額な試薬やキットを買うには、場合によっては年間の研究予算額の1割が必要になることも起こりうる。また外部に委託して研究を進める機会も増えた。研究にはお金が必要である。国もわかってはいるのだろうが、予算が限られている現状では致し方がない。

毎年、採択の時期になると、何人かの方から本書のおかげで採択されたとのメールが届く。苦勞して本書を書いてきてよかったと思える瞬間だ。本書がこれまで以上に研究者のお役に立てるように願っている。

令和2年7月吉日

久留米大学分子生命科学研究所にて
児島将康